頼れる兄貴分だった澤さんに感謝

針生　英一

澤さんの訃報を聞いたのは、一月十七日の夜でした。大河ドラマ放送後のＮＨＫのニュースで、澤さんが急逝されたことを報じていたのです。私はショックでしばし呆然としました。昨年十一月頃に県庁の吉田部長から「今度澤さんが仙台に来られるので、みんなで集まろうという話しをしています。その時には針生さんにも声掛けしますので」と言われたことを思い出しました。その後、澤さんの体調不良でその会が流れたのです。珍しいこともあるものだ、と思っていた直後のことでした。

思い起こせば、私と澤さんとの出会いは平成七年のことで、何かのパーティーだったと記憶しています。ちょうど私たちは異業種九社でマルチメディアの事業協同組合を立ち上げようかというタイミングで、経済産業省から出向してこられたということと、ＩＴを主管している機械情報産業課におられたことがある、と伺って早速アドバイスをいただくこととなりました。年齢的にも私の二歳上ということもあって、「兄貴」のような感じがしました。国の役人とは思えないような気さくな人柄と情報量、そして的確なアドバイスは、これまで私が持っていた「公務員」のイメージを大きく変え

るものでした。

澤さんは「宮城県に居られるのも二年だけだから、その間にできるだけ企業の現場に足を運んで勉強したい」とおっしゃっていました。取るに足らない私の会社にまで足を運んでくださいました。印刷業が従来型の業態ではなく、情報産業としての位置づけやデザインなどの付加価値を向上させ、自己変革していく必要があるという話しを、二人で熱く語り合ったことが昨日のように思い出されます。

ある日、澤さんから、当時テクノプラザみやぎの常務であった菊池隆雄さんに会ってほしいとの連絡がありました。泉パークタウンにあるテクノプラザにお邪魔すると、菊池さんは「澤さんが発起人になって勉強会を立ち上げるので、それに参加してみないか」とのことでした。その勉強会は澤さんの経産省の先輩である加藤敏春さんが執筆した「シリコンバレーモデル」という本を教科書にした勉強会で、後にMIMINet（宮城モデルイニシアティブネットワーク）と名付けられました。このMIMINetは進化し、単なる机上の勉強会ではなく、普段出会わないようなセクターの方々に参画いただき、様々なプロジェクトを立ち上げることになります。まさに現在その必要性が叫ばれている「協働型プロジェクト」の走りでありました。

平成八年頃だったでしょうか。澤さんから声がかかり、宮城県の産業振興アクションプランづくりの委員として参加する機会がありました。それまでは、自分の会社や会社を取り巻く業界のことだけを考えてきたのですが、県の産業振興のプラン作りとなれば、もっと広く物事を見ないといけません。他の委員の方々も、七十七銀行の村松さん、東経連の明間さんなどすごい方々ばかりで、自分なりの意見を述べるのは大変なプレッシャーだったのですが、澤さんからは「中小企業の現場の意見を聞かせてくれれば、それでいい」というアドバイスをいただき、少し気が楽になった記憶があります。産業振興というテーマで様々な方々とディスカッションできた経験は、その後の自分の成長のきっかけとして大きな意味を持っていると思っています。

澤さんとは、宮城県庁を退職し、東京に戻られてからもずっとお付き合いが続きました。東京出張の折に電話して時間が取れれば喜んで会ってくださいました。当社が東京に営業拠点を作った時にも御挨拶に出向き、「お客さんを紹介してもらえないでしょうか」という図々しいお願いをした際にも、その場で十件ほど電話してくださって、その中で六件ほど取引ができるようになったことは驚きでした。確か工業技術院の人事課長時代だったと思います。澤さんの顔の広さだけでなく、周りからの信頼の厚さも感じた出来事でした。

経済産業省を辞められてからも、折に触れてお会いする機会があり、印刷業界や情報サービス産業協会で何度か講演をお願いしたりしながら、澤さんのお話を聞く機会を設けました。「今度仙台に行くから、一緒に飲もうよ」と有難いお誘いも何度かいただきました。最近はテレビにも良く出演されていたのを拝見し、嬉しく思っておりました。

東日本大震災後は、福島の原発問題や今後の原子力政策に対し、澤さんならではの鋭い提言を発信しておられました。まさにこの混沌とした時代に必要なのは、澤さんのような本質を鋭く突くオピニオンリーダーなのだろうと思います。

いま、この文章を書いてみて、改めて澤さんに頂いたご縁に感謝いたします。本当にお世話になりました。

（現在：ハリウコミュニケーションズ株式会社　代表取締役）

MIMINetと私

宮澤　一裕

【仙台との出会い】

平成九年十月一日、私は仙台市役所前に事務所を構える三菱地所東北支店に着任した。前日、妻と犬・猫帯同で仙台ロイヤルパークホテルに一泊し泉パークタウン内の戸建て借り上げ社宅に荷物を搬入、私の仙台での生活が始まった。

私自身は二度目の転勤でもあり会社が費用を負担してくれる転勤により新しい土地で生活できることに魅力を感じていた上に長男が直前までの四年間学生生活を送った土地であることにも惹かれるものがあった。しかしながら地方への転勤を嫌う人が少なくないのも現実で後日実体験することになった。

私の職務は総務担当次長、ということで渉外などの総務的な仕事のほか採用、退職、転勤など人事的な仕事が含まれていた。翌年三月初旬かと記憶しているが転勤予定者のために借り上げ社宅を手当てすることになった。転勤予定者本人夫妻が下見して略決定となり一件落着と思っていたところ、幾日もしないで転勤取り止め、更にしばらくして本人が退社したとの情報が入ってきたのであった。転勤をきっかけに転職したというのが実際のところであったろう。

【MIMINetとの出会い】

三菱地所が開発した泉パークタウンに関連していくつかの関係会社があったがその一つがいわゆる第三セクターのテクノプラザみやぎである。宮城県・仙台市そして県内多くの有力企業などと並んで三菱地所も大株主として参画し「二十一世紀プラザ研究センター」の経営を行っていた。会社設立時からの経緯で当時は菊池隆雄さんが出向していたが平成十年六月の株主総会を経て私がその後を引き継ぐことになり、それが私の「MIMINet」との出会いであった。

前任の菊池さんからは早々に月例会に連れて行かれた。座長の川村志厚先生をはじめとした会員の方々を紹介されちんぷんかんぷんながら各プロジェクトの現状など聞かされることになった。その後、県庁で小川さんを紹介され各プロジェクトにも首を突っ込んでいくにつれてMIMINetの理念、各プロジェクトの社会的な有用性、先進性に心酔するようになったのである。ITによる重度身体障害者の就労支援、インターネットによる生鮮食品などの買い物、遠隔医療、メカトロなどその後の技術進歩により実用化されている分野も多い。テクノプラザみやぎの職員をはじめ関係する周囲の方々が当然のようにパソコンを使いこなしていることに愕然としたのもその頃のことである。

テクノプラザみやぎはMIMINetの事務局機能を果たしていたが座長の川村先生には養賢堂事業、インテリジェント町内会など立場を超えて応援していただいたことに改めて感謝申し上げる。

澤さんには後任の小川さんや井上さんから紹介を受けたくらいで直接の縁は薄かったがMIMINetの活動を通じた理念と人脈は直接、間接に社会の中で活動の根を広げていることを確信している。澤さんの功績はまことに偉大であり早すぎる死を惜しみ心からお悔やみ申し上げる。

平成十三年六月末、東京世田谷の有料老人ホーム経営会社に転勤となり仙台を去った。MIMINetを通じて知り合ったAさんが経営に関係する「一の蔵」は私の愛飲する酒となり毎年都内で開催される「一の蔵を楽しむ会」には今でも時々参加し時にAさんとも言葉を交わす。Oさんが立ち上げたベンチャー企業にささやかな出資をしたのもMIMINetの縁であった。優れたビジネスプランにもかかわらず現時点で成功したと断言できないのは残念であるがその成長を気長に見守っていきたいと思っている。

（元三菱地所東北支店次長、元株式会社テクノプラザみやぎ常務取締役）

澤さんが遺してくれたもの

横山　英子

宮城県で地震が発生するたびに、澤さんから「大丈夫？」とのメールが届く。そのメールが昨年の秋から来なくなった。多忙な澤さんのことなので、しょうがないなあ、と気にもせず毎日を過ごしていた。あのとき連絡していればと後悔の念。

一九九六年、私が仙台青年会議所の専務理事のとき、澤さんは宮城県商工労働部次長。ある日、仙台青年会議所の事務局に電話が入り、「専務理事に会いたいので連絡がほしい」との澤さんからの伝言。面識がない方からの伝言に戸惑いを覚えながら、電話をした。声の主は宮城では聞きなれない堪能な関西弁。「県庁に来てほしい」と厳しい口調。単身県庁へ出向く。次長室にいる澤さんは、役人らしからぬ風貌で、人懐っこい笑顔。電話口の印象とは全く違う。「ゴルフはするの？」「どんな仕事しているの？」「仙台の青年会議所ってどんな活動しているの？」など所謂世間話。肩透かしにあったよう。印象的だったのは「会合に行く前に、必ず担当者から『常識の範囲で発言してきてください』と釘を刺されてしまう。言われた通り、かなり抑え気味に発言してきても、『次長言ったじゃないですか。また何か余計なことを言ったらしい

ですね。』宮城の常識と自分の常識が違うのかなあ」「でも、出る杭は打たれるが、出すぎた杭は打たれないんだよね。」澤さんの勢いに圧倒されて聞き入るだけであったが、私の座右の銘と出会った瞬間であった。ただ、それはのちに気づくことになる。

東京にお戻りになったあと、お会いする機会が増えた。大阪府知事選や三重県知事選に友人が出馬するので、支援者を募って欲しいと頼まれたのがそもそものきっかけだった。その後、若気の至りから怖いものなしで何でも相談するようになったが、断られたことは一度もない。アドバイスの内容はいつも的確で厳しい。官僚的な目線ではなく、地域目線、市民目線、現場目線を重んじた。その厳しさは愛情溢れるものであり、地域を育み、国を創っていく人を育む源泉となったのである。

澤さんのまわりには、いつも魅力的な女性たちがいた。私が澤さんを誰かに紹介するときの枕詞は「エッチな澤さん」。これには　さすがに紹介されたほうが苦笑いであったが、私は最高の褒め言葉として使っていた。女性に寛容であり、たくさんの機会を創出し、正当な評価をし、世に送り出す。世に送り出された女性たちは、澤さんがいなくなったことを誰よりも憂えている。誰を恐れることなく、正義を徹す。東日本大震災のあと、日本中が不安のどん底にいるとき、澤さんは毅然と戦っていた。私

はどんなに勇気をもらったことか。今年の元旦、最後にいただいたメールの言葉は

「今まで、いろいろありがとう。おかげさまで仙台、宮城は第二の故郷となりました。」

澤さんのかわりはどこにもいない。澤さんの遺してくださったものをしっかりとこの地で育んでいくことが、私たちの使命。ご冥福を心よりご祈念申し上げます。

（現在：株式会社 横山芳夫建築設計監理事務所　代表取締役）

事務局を担って

菅野　智子

ある日、「泉パークタウンの中で情報を活用したコミュニティ交流会を開こう。地域を巻き込んで新しい事業を立ち上げよう。」と当時の菊池常務が唐突に社内で話し出しました。

突然の提案で、誰が？何を？どんなことするの？お金は？・・・・・・と、戸惑った事を覚えています。（菊池常務が「俺が良いって言ってるんだからやるぞ！」って・・・）

会が動き出すと、あれよ、あれよという間にMJKSという組織が設立され、様々なプロジェクトが立ち上がり、㈱テクノプラザみやぎが事務局を担う事となりました。

仙台にも「何かしたい。」「こんなこと出来るよ。」と様々なアイディアを持った方々が大勢いる事にビックリしました。

また、川村座長や菊池常務、その後を引き継いで下さった宮澤常務のリーダーとしての凄技に踊らされ様々なプロジェクトへ片足、両足とすっぽりはまってしまい事務局の一員として動いておりました。当初は会計だけだったんですが・・・。

当時の㈱テクノプラザみやぎの社長・山本壮一郎氏がMIMINet（MJKSの第二ステージ）の設立総会で、「この新しい試みがインキュベーション・ラボとしての当社

の役割と深く関わりを持つ活動であると判断したため、事務局の役目を引き受けている。産・学・官によるエコノミーのシーズは地域コミュニティのニーズというフィールドにおいてこそ孵化し、成長する。いわゆるインキュベーションである。」と言われたことで、「なんか、すごい試みに携わっているんだな。」と思ったことを思い出しました。

その後、宮城県が誘致した「第五回チャレンジド・ジャパン宮城会議」では、MIMINetが事務局となり会員の方々が率先して運営に協力し、自主的に事務局業務を担ってくれました。宮城会議に参加された多くの方々の協力もあり大成功?を収める等、大きな達成感を味わう事が出来ました。（一部徒労感あり、燃え尽きました。）

今は、MIMINetの活動も縮小し、一部のプロジェクトが単独で活動を続けている状態ですが、この活動を通して多くの事を経験させていただいた事は、私の財産となっております。

澤さんが宮城県に赴任しなかったら、澤さんと川村座長、菊池常務が出会わなかったら、ここまで発展した組織は出来なかったのでは、このような経験ができなかったのではと思っております。貴重な経験の場を作って頂き有難うございました。

（株式会社テクノプラザみやぎ）

事務局を担って

齋藤　智美

私がMIMINetの事務局担当となったのは、澤さんが宮城県を去られた平成十一年頃からでした。今でこそＮＰＯという言葉が市民権を得ていますが、当時は「Not-for-Profit Organization（非営利活動組織）」から説明するということが何度もありました。

そして「この指とまれ」方式による、「西多賀」「メカトロ」「ドリームスター」「たすけあい機器開発プロジェクト」などのプロジェクトが立ち上がって活動しており、毎月一度の例会で活動を発表するのが定例となっておりました。

プロジェクトによっては、国や県などから補助金をいただき活動していたものもありました。私もMIMINetによる在宅就労支援事業や当時のテクノプラザみやぎの常務取締役であった宮澤さんが立ち上げた「業務仲介等活用支援プロジェクト」の補助金の事務局も担当させていただきました。

今振りかえりますと澤さんや菊池（元）常務、川村先生がMJKSがMIMINetになり、当時は結構な仕事量もありましたが、お金には代えられない貴重な経験をさせていただきました。時代の先駆けを見せていただきました。ありがとうございました。

（株式会社テクノプラザみやぎ）

澤昭裕追悼集

発行者　川　村　志　厚

発行日　平成二十八年七月

印　刷　ハリウ コミュニケーションズ株式会社